

せんだかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五号（毎月一日発行）
平成二年三月一日

古平町の地名

近藤 芳二

六、入船町 ボクサム

「ボクサム」という地名は永田地名解にあるが、他の資料では見当たらない。ボク・サム（蔭の傍）という意味とされている。そう解釈すると現在の入船町であろうか。

七、ソキシヤム

この地名は、武四郎の再航えぞ日誌にのみ出てくる地名である。「番屋あり、トマリエサンより此ところ凡そ一二、三丁位也。又素浜行こと凡そ五、六丁にしてモヤシヤム」と記されて

いる。
現在場所を特定できないが、ソーケシ（滝の下）のなまったものではないかと、考えられる。

八、メメタライ・カムイミン

ダラ（港町）

メメタライ（松浦日誌）・カムイミンダラ（永田地名解）となっている。永田地名解では、「和人なまりて耳垂（みみだれ）又は、垂比見（たれひみ）」

スケソ大漁

とれすぎて肥料にしても安い

暮れまでは釣りが不漁だったが、正月からはどこも大漁。浜は大賑わいである。一万尾以上

と説明されている。
カムイ・ミンタラ 神の庭・（神聖な場所とでもいうのであろうと、説明している。）

九、神社の沢 カムイチセナ

イ

永田地名解にあるだけで、他の資料にはない地名である。長い間その場所を特定できなかった。ただ、カムイミンタラとチヨウピタンの中間であろうと、見当つけていた。

カムイ・チセ・ナイ（神・家庭）となるので、神社のある沢と訳したが、どうもそれらしい場所がないので忘れていた。あるときバスの窓から、沢の奥

の水揚げがあったという。あまり大漁で値段が下がり、親方のほうも景気が今ひとつという。浜の売値も、二十五尾で十銭とは安い。これなら畑の肥料にしても間にあう。
これは昭和六年の話である。

に黒い建物がたっているのを発見し、調べてみると古い神社であった。
これで、地名と場所とが一致した。

△7月の山来米事

- 古平漁港鉄道期成会が結成される（昭和三年）
- 古平救難所が帝國水難救済会總裁から表彰される（五年）
- 満洲事変から凱旋した兵士の祝賀会を開く（九年）
- 武田町長宅から出火し自宅と雑倉を焼失する（同年）
- 国民労務手帳法が公布、身分証明書でもあった（十六年）
- 鮮魚・魚介類も戦時統制品に指定される（十七年）
- 戦争遂行のため古平翼賛壮年団が結成された（十八年）
- 町民の寄付により戦闘機へ古平号を献納する（十九年）
- 物資動員で金属製のボタンまで回収される（同年）

故郷の想

浜中幸三

私が小学生の頃は少年野球が大変盛んで、全道大会が新聞紙上を賑わした時代であった。

その頃、札幌豊水小学校という有名校があったが、古平出身の飛沢先生（後に北海高の名監督）と山口忠治さんのお骨折り、④の干場か種金の干場だったかはっきりしないが、親善試合があった。たまたま歩いて見に行つたがその時の感激は今でも忘れられない。対戦相手は古平代表のサンダー倶楽部で、梅野潮太郎さん、松尾さん、本間シンちゃんなどがいた。豊水小の左ピッチャーのセットポジションフォームが、全く私たちの知らない新しいフォームで驚いた。両手を高く上げ、ゆっくり下ろして胸の前でセットするのが、子供心にたまらなく上手に見えた。ゲームの進行も都会的ですごく感動した。

私たちは、少年の頃にはユニホームを着たことがなかったの、それはそれは格好よくスマートに写った。（グローブも自分用のものは無く、誰かのを代わり番に使っていた）。

今、不思議に思うことは、旧小学校グラウンドにしても本陣のグラウンドにしても、随分狭い所なのに、あれでよく野球ができたものだと思う。今のボールならぼんぼん飛ぶのでとても無理だったろう。昔は、よくボールの破れた記憶があるから粗末なものだったと思う。今ならホームからレフト、ライトで九十五ヤード以上ないと無理、中学女子のソフトでも六十五ヤードが限界なのだ。

子供の頃（昭和初期）、私たちの楽しみはやはりお祭りだった。私は、角力大会には必ずといっていいほど出た。成年の角力大会も盛んだったが、子供の角力大会も結構あった。

熊野山の祭り、沢江の祭り、恵比須神社、琴平神社その他あちこちで角力があつたような気がする。

小学校でも土俵を作つてた。後藤先生や塩原先生など角力の好きな先生が指導をしていて、強い選手も多く出たようだ。中学校になつてからも三河先生などが一生懸命お世話をして、管内優勝をした時代もあつたようだ。

その当時、正確なことはわからないが桐沢定吉さんが勧進元で、東京大相撲が古平小学校の広場で開かれた。横綱千代の山が人気を集め、余市その他近郷から沢山の観客が来たものであつた。

— つづく —

鯨漁夫三百人ほどが

汽船二隻に乗って来る

二月下旬になるとヘヤン衆が姿を見せる。青森方面から団体が汽船で来ることもある。行李（こうり）や下駄を持ち、布団を持って来る者もいる。町も急に活気づいてくる。

昭和初期の町の風景である。

■古平漁港災害復旧工事が完了する（二四年）

■敷地を買収し古平公衆浴場の建設に着手する（二五年）

■古平老人極楽会が再発足する（二七年）

■博洋丸の乗組員が海に転落し行方不明になる（同年）

■沖村道路で雪崩により平野正国が死亡する（同年）

■古平町消防後援会を結成し会長に蓮実豊光就任（二九年）

■漁協総代会でアワビ・ウニの三か年禁漁を決める（三一年）

■稲倉石が環境衛生のモデル地区として表彰（三四年）

■浜町の伝染病隔離病舎を解体する（三七年）

■消防の功勞で皆松勇助が藍授褒章を受ける（四二年）

■第十一北光丸が着氷で転覆し乗組員全員が死亡（四五年）

■学校統合により稲倉石中学校が閉校式を行う（四六年）

■第三妙福丸が遭難し乗組員九名が死亡する（四八年）

■沖村国道で雪崩のため小型トラックの三名負傷（四九年）

古平で ホンモノの

『飛行機大会』

着陸に失敗——墜落

大正十四年七月十二日——

このところ町内は、飛行機の話でもちきりだった。飛行機を有料で見物させるといふのであるが、これには「航空思想の普及」といふ目的があつて、あわせて講演会も開くといふものであつた。

最初予定された十一日は琴平神社祭当日であつたが、あいにくの曇天で、飛行には都合が悪いといふことで翌日に延期された。

十二日はやや風があつたが晴れ、午後四時札帳を出発するといふのに、二時ごろから空を仰いだり、屋根に上がつていた人までいたという。町中が大騒ぎをしているうちに、やがて六時二十分ごろ上空にその姿を現した。大勢の観衆が興奮し見守る

なかを、競馬場（中島グランド周辺）に着陸しようとしたところ、やなぎに翼を引っ掛け、小川に突っ込んでしまった。しかしこれがクッションになつて、機体の損傷は布張りの片翼と胴体が破れ、木製のプロペラが折れ、脚がねじ曲がつたが、一週間ほどで修理が出来るとのことであつた。

この日は、遠く積丹方面からも見物に人が集まり、「墜落した」と聞いて、それでまた人が多く集まつたという。

乗員の永田一等飛行士は、頭や肩にけがをしたが軽傷、もう一人の荒木飛行士は無事であつた。

この飛行機（複葉機）は、千葉県津田沼東亜飛行学校から飛んで来ていたもので、その翌十三日には、飛行学校川辺校長の講演会が小学校で開かれた。

ちなみにその時の見学科は、大人二十銭、小学生十銭であつた。

その後、飛行機の修理のほうは材料の到着が遅れてなかなか

進まず、はじめ八月六日の飛行予定がまた延期になり、ようやく八月十六日になつて飛び立つことになつた。

この日は天候は曇り。修理を終えた飛行機は、町中挙げての大観衆に見送られて離陸、一路小樽へ向けて飛び立つたのである。

このまま何事もなくうまくいってくれれば良かったのだが、なんと、今度はエンジンの故障で有幌海岸に不時着、幸い乗員は運が強く無事だったが、機体

〔新潟県人会〕

故郷を出てみて、故郷を懐かしむ気持ちは誰しもひとしおのものがある。

明治の始め、青雲の志を抱いて未開の北海道へ移住して来た人たちにとっては、なおさらのことであつたらう。

ここに、昭和三年一月『古平新潟縣人会会則』と『名簿』が

はすでに修理不能の状態であつた。

「愈々もつてツイテいない」と、高野名幸作さんはその日の日記に書いている。

古平での事故で折れた木製のプロペラは、旧古平小学校の運動場に掲げられてあつたが、現在は小学校にそのまま保存されている。

※この記事は、高野名幸作さんの「日記」と、その他の資料によつたものですが、ひとことお礼を申し上げます。

ある

会則の第四条には、「本会ハ會員相互ノ親睦ヲ図ルハ勿論各自ノ進歩発達ヲ目的トス」とある。会員は百十七名で、年一回の総会のほか観桜会や観楓会、弔慰や会員の不幸には援助をすることなどが記されている。

「総会の会費八十銭、飲食に五十銭、三十銭は積立て。八十余名が出席し十分に飲んだ。」という記録が残っている。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽
道内交通事故第一号と

古平での交通事故

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

春の陽気とともに、また交通事故が心配されるこの頃だが、無事故を願いながら一寸古いことを調べてみようと思う。

明治の末頃、当時の金持ちはずでに自動車を持っていたが、それらは中古車であったためとかく故障が多く、修理する者もないことから道路に放置されているものも少なくなかった。ところが、ある自転車屋の機械好きの青年が本を見ながらそれを修理し、タイヤは木製に代えてなんとか走ることに成功した。得意満面で行っているうちに突然エンスト、セルモーターもついてない時代なのでクラック棒を回したところ、エンジンがかかり車は青年をおいて走り出してしまった。追いかけて飛び乗ろうとしたとたん、足を

踏みはずして転倒。その腹の上を木の車輪が越えていった。内蔵破裂の重傷かと思われたが運よく助かった。

これが北海道における自動車による交通事故の最初で、時は大正二年夏のことである。この青年はその後もこりずに

はるか九州から
花の便りにのって
 〓〓〓〓

以前、沢江町に居られた大沢正明さんから、「たまたま『せとかむい』を読んで古平のことを懐かしく思い出しました。」というお手紙をいただきましたので、ここに、その一部をご紹介します。

(前略) 鯉漁場を想う時、私が最もひかれるのは、明治・大正期の全盛期よりも、漁獲量が減少し、変動が激しくなった昭和十年代以降のほうです。その頃の人々が鯉を待つ姿には、生活のためというよりも、むしろ

自動車をいじくりまわし、ついには自動車の業界に入り、昭和四十一年、北交ハイヤー監査役で退職した葛岡喜代郎がその人である。*

* 毎日新聞社『開拓』引用
 死者が出たのは大正五年と、旧内務省の統計にあるが氏名な

ろ夢とかロマンとか生活を超越するところがあって、私は好きです。

鯉の渡来が途絶えた昭和三十年頃のこと。近くの、確か丹後さんという家のおじいさんが、海辺の道の縁台に腰掛け、丹前にくるまって、来る日も来る日も双眼鏡で海を見ていた姿は、今、私の心の原風景といってもいいような重みをもってよみがえってきています。

最近ことに、(運がよかったな)と思う時があります。良い故郷を持つ(運)に恵まれたなと。(後略)

(福岡県大野城市緑丘三丁目 十二の九 大沢正明)

どは不明である。

さて古平町ではどうかという
 と、昭和十一年八月三日、「トラック事故で男が死亡した。」という記録はあるが詳細はわかっていない。

+++++

寄贈お礼

- ♡ 合同句集 **花曆**
- ♡ 仲谷美砂さんより
- ♣ 句集 **端居**
- ♣ 高橋磨智子さんより
- ♣ 消防団関係資料
- ♣ 護摩海上安全祈願札
- ♣ いずめ
- ♡ 北橋幸雄さんより

—あとがき—

近ごろは、文化会館に所用でおいでの方が編さん室へちよいちよい寄ってくれて、昔のことやおもしろい話題・資料を提供してくれれます。大変有益なお話して喜んでおります。気軽に寄ってみてください。(M)